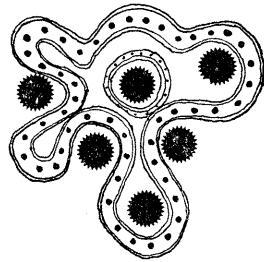


西ドイツ、マールブルクの子どもたち

美谷島　いく子



はじめに（大学街マールブルク）

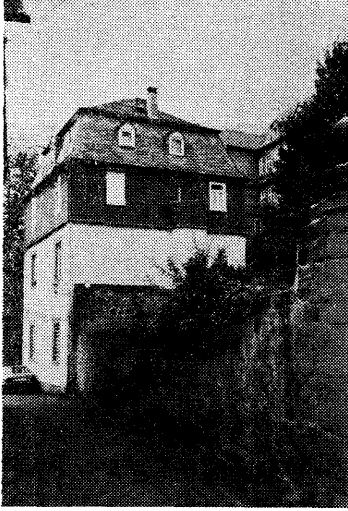
私は、一九八一年十月から一年間を一歳半の娘と共に、西ドイツヘッセン州ラーン河畔の大学街マールブルクで過ごした。大学は、宗教改革後、一五二七年に、諸侯フィリップ王により、世界最初の新教大学として創立された。王に因んで大学は、正式には *Philips Universität Marburg* と言ひ、先年四五〇年祭を祝った。宗教都市

でもあるマールブルクのもうひとつの顔は、低地に聳え立つ初期ゴシック様式のエリザベート教会（十三世紀）と、こんもりとした城山の頂上の、赤い砂岩のヘッセン地方伯の城館（十二世紀）である。城内は博物館になり、ルターとツヴィングリが宗教討論した（一五二九年）部屋も残っている。

マールブルクは、現在、人口わずか七万人の内、大学生が一万五千人を占め、街に大学があるというよりも、

大学の中に街がある感じである。大学の古い建物は城山
一帯の旧市街に点在している。大学の図書館は、西ドイ
ツ一の蔵書数を誇るという。

この街には、グリム兄弟や、ペーリング（血清研究で
第一回ノーベル賞受賞）が学んだ。三木清も、ハイデガ
ーの講義の名声を聞き、ここに移り住んだ。古くは修道
院であったというアルテ・ユニの歴史的な壁画とシャン
デリアで飾られた講堂では、グリム兄弟を記念したグリ
ム賞の受賞式が、今年も行われた。この地方からも、グ



▲ザヴィーニ教授の家

リム童話が、名も知れぬ人々の口伝えに従って集められ
た。坂の多い石畳の道を歩いていると、童話語りのおば
あさんのような民族衣装を着ている老人によく出会う。

城山の中腹にある市庁舎（ラトウネン）の前では、市場（マルクト）が開かれ、人
々で賑わう。市庁舎の近くには、グリム兄弟の下宿や、
ベッティーナ塔（トウネン）、ザヴィーニ教授（グリム兄弟の師）の
家が残り、歴史を今に伝えている。グリム童話の原形
は、グリム兄弟がザヴィーニ教授の子どもに送った手紙
に遡ることができるという¹⁾。市庁舎の時計塔で、鐘楼
守がトランペットを吹き、雄鶏がはばたいて時を告げる
のを、泉（ブレンネン）の石段に佇んで聞いていると、一八〇年の昔
のグリムの時代にいるような気がしてくる。

歴史を秘め、珠玉のように美しいマールブルクでの一
年は、育児で忙しく瞬く間に過ぎた。子ども連れで行動
範囲も限られ、狭い時間間より垣間見たものに過ぎない
が、逆に、子どもと一緒だからこそ体験できたこともあ
る。そんなことも含めて、ドイツの子どもの達のこと、幼
稚園のこと等、記してみたい。

まず、教育制度の概略を話したい。西ドイツの幼稚園 (Kindergarten) は、日本と同様に、三〜六歳児を対象とする。公立と私立 (シュタイナー学校や教会付属) があり、料金は、月額 60〜120 DM (1 DM ≡ 100 円) 位である。他に乳児から三歳までの小さい子どもを預る保育所 (Kinderkrippe) がある。又、教会付属で、一歳半以上の幼児と遊んでくれる託児所 (Kinderspiele) もある。

六歳からは、四年制の基礎学校(Grundschul)に入学する。基礎学校が午前中まで終るので、母親が働いている鍵っ子は、学校終了後を学童保育所 (Kinderhort) で過す。十歳の時、ギムナジウム (九年制、卒業後大学進学)、実科学校 (六年制、専門大学、専門工専進学)、基幹学校 (五年制、卒業後就職につく) に進路が分れる。

子どもが、基礎学校の新学期に持ってゆくものに Schultüte がある。厚紙で作られ、三角形のとんがり帽子のような形をし、美しく飾られた Schultüte の中に、御菓子を母親に一杯入れて貰う。秋の始業式の日には、大きな Schultüte を抱え学校に向う子ども達の嬉しそ

な姿が見られる。新学期の始まりを、喜び祝ってやる楽しい習慣といえよう。

西ドイツでは、最近出生率が低下し子どもが減少している為に、政府から児童手当(Kinderzuschuss)の支給があることを付加したい。

「Kinderspiele (託児所)」

マールブルクでの生活も三ヶ月目に入り、少し慣れてきた頃、ユニ・ゲストハウスの洗濯室で、教会付属の Kinderspiele の掲示を見た。「火、木曜日の午前九〜十二時、対象児は一歳半以上」とあった。

十二月に入ると、日毎に空の暗さが増し根雪が降る。日も短くなり、午後四時頃には、もうすっかり暗くなってしまふ。朝、零下15度位に気温が下がり、日中もほとんどそのまま、日光を見ることがない日が続く。毎日、ベランダに掛けた温度計と睨めっこで生活していたが、幼い娘を抱えて、無事冬を越せるかと不安になってきた。日照不足なので、子どもは保健所からカルシウム

やビタミンを貰って飲んでる。春、夏に、好んで日光浴をするのも頷ける。戸外での遊びがほとんど不可能となり、家の中ばかりで少し持て余している娘を見て、「寒い寒い！」と閉じ籠っているよりも、気分転換してと思い、Kinderspieleへ娘を連れて行ってみることにした。

初めての十二月十七日の日記に「リュックに代えの紙おむつと御八つを入れ、午前八時四十五分に零下15度の中、家を出る。30cm程積った雪道なので、車の轆わだちや、掻き集められた雪の山で、時々ベビーカーが進まなくなる」とある。この寒さの中、思いきり厚着をさせた積りでも、稚い娘が凍えてしまわないかと心配で、膝の上に、娘がお気に入りのマックスとモーリッツの毛布を掛けてやる。娘は、案外、寒さには平気ではしゃいでいる。小さい木製の櫓に子どもを乗せ送迎しているのも北国らしい。

Kinderspieleは、教会の一室(20畳位)で、老婦人のボランティアにより行われていた。部屋に入ると、緑色

のセーターに大粒の琥珀のネックレスの良く似合う上品な老婦人が「お早イェアレン・モルゲンう」と笑顔で迎えてくれた。娘の住所、氏名、年齢、親の職業、連絡先をメモする丈で、無料で快く預ってくれる。

娘は、もう、男児と一緒に、赤い自動車に乗って遊び始めている。その日は、子どもが八人(一歳半〜三歳のまだ幼稚園に行っていない子ども)に、先生である老婦人が三人だった。その中の一人は、自分の孫を連れて来ていた。先生達は、三人位ずつで、火と木曜日で交代していた。その日、子ども達は、自動者、自転車で走り回って遊ぶ者と、机の回りで、静かに積み木、レゴ、ブロックをする者があった。子どもの自発性を重んじた自由保育である。十時に、先生が御八つの歌を歌い始め、子ども達は持参した御八つを頂く。私は、一先、帰宅し、十二時に娘が泣いているのではと心配しながら迎えに行った。先生から「良い子でいたこと、娘が皆の前で、蝶々の歌を歌いながら踊ってみせたので、皆が笑った」と言われ、一安心する。

そんなに充分と言える施設ではないが、そこで、にこやかに迎え入れてくれる老婦人が、何よりも魅力的だった。彼女達の中には、二度の大戦で想像を絶するような苦勞をした人もいるに違いない。しかし素敵に年を重ねている。そんな白髪のお祖母ちゃまが、自然にさりげなく、人生の終りの時期を、子どもと遊ぶことに当てるお、それがとても楽しそうなのが嬉しかった。

「Kindergarten (幼稚園)」

幼稚園の入園は、日本のように四月一斉にでなく、各々が三歳の誕生日を迎えた時に、個人的にする。近くの市立幼稚園は、級は縦割りの三〜六歳児混合で、自由保育だった。広い芝生の庭があり、保育室には、絵本の棚、飯事のコーナーが設けられ、窓には、一般のドイツの家庭と同じように、季節毎の美しい飾り付けがされていた。

ドイツ人は、十一月のラテルネ、十二月の降誕祭、二月の謝肉祭、三(四)月の復活祭等と、季節の節目毎

の行事を大切に守っている。これらの行事は、雪と氷に閉ざされ、単調に流れがちな長い冬の時間に、リズムを付け、新しい始まりの時間を蘇らせた。非日常の世界の出現により、雪と氷の無彩色の世界に彩をそえ、日常生活を活性化させる。幼稚園でも、これらの行事が重要な位置を占めている。紙数の制限上、その中から、幼稚園での謝肉祭のことを中心に述べてみたい。⁽³⁾

二月に入ると、寒い中にも春がもうそこまで来ている。日記を見ると、「二月一日―午前十一時二十分、部屋の中で久しぶりに暖い日差しが射し込む。窓を開くと、娘は、ベットの上に射し込む陽光に驚き『ほら、これ見て、これ、これ、これは?』と質問し、目を細めて光と遊ぶ。七日―娘が、森への散歩の途中見つけたと、可愛い万作の枝を持ち帰る。十三日―氷の溶けたライン川で泳ぐ白鳥に、娘は餌を投げてやり、白鳥が食べるのを楽しむ」この頃になると、大人も子どもも、謝肉祭の化装のことで夢中になる。

謝肉祭は、復活祭までの約四十日間に亙る精進生活の

始まる前に、仮装をし大騒ぎするカトリックの祭である。しかし、長く蔽しかった暗い冬を追い出し、待ち遠しかった薔薇の花開く明るく美しい春の到来を喜ぶ土俗的風習とが重り合って、今日の祭の姿となっているとい



▲幼稚園のカーニバル

う。謝肉祭の前日は、「Rosenmontag」薔薇の花開く月曜日」と美しい名で呼ばれている。日本の節分が、豆撒きにより、冬の様々の鬼を追い出し立春を迎えるのと似ている。

その幼稚園では、謝肉祭を二月末に控え、園の二月のテーマは「メルヒェン」で、それに従って遊びが展開されていた。一日からの第一週目は、メルヒェンの中の狼について話し合う。グリム童話「赤頭巾」の話をする。赤い頭巾を描いたり製作してみる。第二、三週も、自由保育の中で、メルヒェンに因んだお話、歌、遊び、製作が行われる。例えば、子どもの夢の中の王子様や王女様を描く、童話を話したり聞く、仮装用のお面の製作や、窓にはる切り絵の製作……。

二十二日の Rosenmontag は、園児は、各々前から決めた配役の仮装をして登園する。今日の園は、赤頭巾、白雪姫、墓の王様、魔女、騎士、インディアン、馬、兎等と、どこか小人達の御伽の国に行ったようだった。八時十一時までは、仮装姿で級の部屋で自由に遊ぶ。登園

した当初は、慣れぬ姿に何かぎこちなかったが、流行のレコードが流れ始める頃になると、仮装の人物らしく生き生きと動き始めた。特別の、皆で作ったポップコーンと、園で用意したお祝いのケーキとオランジエンザフトを頂いた。その後、講堂に集り、皆で簡単なオペレッタをした。帰宅後、家の人と街の化粧行列を見にゆき、餡チョコレート、ミモザの花、小さな玩具等を拾う。

二十三日の懺悔の火曜日は、各々思い思いの自由な化装で登園し、十一時まで自由遊び。その後、「ブレイメンの音楽隊」等の短い映画を見た。

次の三月のテーマは「日本」であった。そのテーマを決めた理由は、次のようである。日本人の園児が、ある日の御八つに、日本から送られてきた小魚の燻製を持っていき骨までおいしそうに食べていた。ドイツ人の子どもが、それを見て驚いてしまい、日本人は何を食べ、どんな生活をしているかという疑問を持ったことに始まる。第二週の世界地図の中の日本を見つけることから始まり、日本人はどのように話し、どのようにして料理

して何を食べるかという子どもの疑問に答える為、日本人の母親が園にゆき、日本語を話してみせたり、天麩羅の実演をして見せ、園児と一緒に食べた。折紙をしたり、日本の絵本「牛若丸」を先生に読んで貰う。日本に復活祭の兎はいるかを話し合う等と続いていた。子どもも素直な驚きや感動を大切にして、外国人をも配慮した保育がなされていることに感心した。

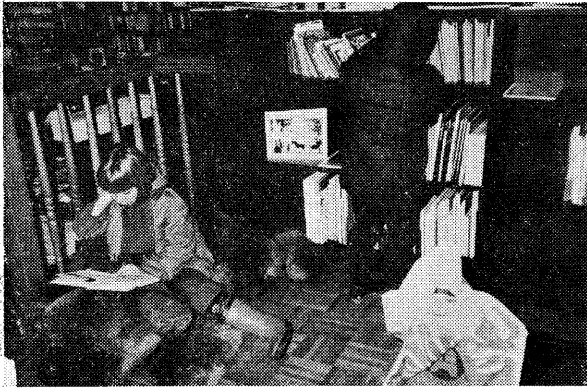
ドイツ語を教わっていた友人の母親が、別の幼稚園の先生をしていたので、「何歳児を教えてくださいか？」と不用意にも尋ねてしまい、「幼稚園では教えているのではない、一緒に子どもと遊んでいる」と断言され、ドキッとしたことがあり、ドイツはやはりフレイベルの国だと思つたことが忘れられない。

おわりに

西ドイツは、小さい子どもと共に生活する場合、冬の寒さを除けば、日本より生活し易い。幼稚園(Ⅱ)、基礎学校とも午前中文で終るので、子どもの時間が自由でゆっ

たりと流れている。子どもに寄せる細かい心使いが随所で見られ、娘と一緒に困ることが少なかつた。

例えば、子どもの生活用品は、派手ではないが、発達しつつある子どものことを考えた良質の物が豊富にあ



▲エルベルト書店の子どもコーナー

る。(特に玩具、靴等)

バスには、ベビーカーに子どもを座らせたまま乗ることができ、中央部に、ベビーカーを置く広い場所が確保されている。面白いことには、人間程もある犬が、ベビーカーの横にきちんと座っている。犬の場所もここなのである。ドイツ人が敵しい躰をすることから「犬と子どもはドイツ人に育てさせろ」と言われるが、犬は良く躰られていて、粗相をしたり、騒いだりするのを見たことがなかった。子ども達が、車中で騒いでいて、注意されている姿を見かけることは時々あった。社会全体が、子どもを敵しく躰、守り育てている。

「ドイツには、美術館、博物館が多い。そこで、いつも楽しそうに見学している基礎学校の子ども達に会った。子ども向けの詳しい案内書が用意されている所もある。ニュールンベルクの玩具博物館、フランクフルトのゼンケンベルク自然博物館、もじゃもじゃペーター美術館、ミュンヘンのドイツ博物館と、二歳の娘でも退屈せずに見られる所があるのは嬉しかった。

本の老舗エルベルトには、寄せ木細工の六畳位の子どものコーナーがあった。そこには小さな机と椅子が置かれ、子どもが自由に読むことができる非売品の本が並び、大きな縫いぐるみの熊が待っていた。最初の子どもの絵本『世界図絵』（コメニウス著）が、世界中の何処にも先駆けて、ラテン語とドイツ語で出版された（一六五八年）のも、ドイツ、ニュールンベルクの一書店からだったのを忘れることはできない。

霧が深く、日差も弱い北国ドイツでは、子どもが成長しつつあるその過程が、大切に考えられており、ポール・アザールの言うように少年時代という樂園が立派に存在する。浪漫あふれる冒険や旅の好きなドイツ人が、目的地に着くことよりも、旅ライゼをしていることの方を大切にするように、人生という果しない旅の始めである子ども時代が、長く続くよう配慮されている。ゆっくりと長閑に流れる時間の中で、成長しつつある子ども時代が大切に扱われ、小さい大人としての中途半端な場所ではなく、子どもの為の確固とした場所が与えられているので

ある。

注(1) 高橋健二『グリム兄弟』新潮選書 昭和43年

(2) 児童手当は、第一子50DM、二子80DM、三子150DMと、子どもが多くなる程、子ども一人当りの額も増す。（一九八一年）

(3) 幼稚園でのラテルネについては、拙稿『マールブルク子ども歳時記』舞々5号で述べた。

(4) 親の希望により、午後も保育を受けられる場合もある。

